

重症化の危険性があるロタウイルス性下痢症

感染性胃腸炎といえばノロウイルスが有名です。このノロウイルスのピークが過ぎると、次に増加するのがロタウイルスです。ロタウイルスは例年1~4月頃に流行すると言われ、まさに今の時期がロタウイルスに注意が必要な時期です。

ロタウイルスは感染力が強いため、保育園など集団生活の場で1人でも感染者が出れば、集団感染して大流行する恐れがあります。



【ロタウイルスの症状】

2~4日の潜伏期間（感染から発病までの期間）の後、激しい嘔吐と白色の下痢便（下痢便だけの場合もあります。）、38度以上の高熱がでることがあります。

ロタウイルスの症状は、ノロウイルスと同じく、嘔吐や下痢、腹痛などです。症状は非常によく似ていますが、大きく異なるのは感染しやすい年齢です。ノロウイルスは年齢に関係なく感染・発症しますが、ロタウイルスが感染・発症しやすいのは生後6ヶ月~2歳の乳幼児。5歳までにはほぼ100%の小児が感染するといわれています。さらに注意が必要なのは重症化する危険性があるためです。ロタウイルスによって毎年数名の死亡例が報告されています。乳幼児が重症化する危険性があることから、診断確定のため検査キットが開発されています。病院によっては便に排出されたウイルスを検査することがあるため、診察の際はオムツなどついた便を持参するとよいでしょう。

大人も感染するのですが、免疫があるために症状が出ないか、もしくは発症したとしても軽い症状ですむことが多いといわれています。しかし症状がでなくてもウイルスは体内にいて、便とともに排出されるため、知らず知らずのうちにウイルスを子どもに感染させてしまうということもあります。さらに大人でも免疫力が落ちてると、小児と同様に、嘔吐、下痢、発熱という症状がでることがあります。子どもがロタウイルスに感染したら、大人も十分に注意する必要があります。

【ロタウイルスを防ぐために】

ロタウイルスはウイルスが口の中に入ることによって感染しますが、その感染力は強力です。ロタウイルスに感染した患者の便1mlには1億~100億個のロタウイルスウイルスが含まれるといわれていますが、わずか10個程度のロタウイルスで感染してしまいます。従って感染を防ぐためには手洗いや消毒などをしっかり行うことが基本となります。トイレの後や患者の下痢や嘔吐物を処理した後、石けんでしっかりと手を洗うようにしましょう。下痢症状がでる2日前から、症状がでて10日後までの間、便の中からロタウイルスが検出されることがあります。症状がおさまったからといって安心せず、食事前やトイレ後の石けんでの手洗いは必ず行うようにしましょう。衣類に嘔吐物が付着した場合は、他の衣類とは分けて洗濯します。水洗いの後、うすめた塩素系漂白剤（5~10%次亜塩素酸ナトリウムなら50~100倍に薄めて使用）で消毒しましょう。また下痢や嘔吐物が乾燥すると、含まれていたウイルスがホコリと一緒に舞ってしまいます。乾燥する前に処理するようにしましょう。

【治療は？】

ロタウイルスに効果のある薬はありません。嘔吐、下痢、発熱が続くと脱水症状を起こすことがあるため、水分補給をすることが治療の中心です。特に小さな子どもは体全体における水分の割合が高く、脱水になりやすい傾向があります。ある統計によれば、就学前小児のロタウイルス感染症の患者数は年間80万人に及び、感染者の15人に1人（7万8000人ほど）が入院していると推定されています。水分補給をしてもすぐに吐いてしまう、尿が出ていないなどの場合は、早めに病院を受診するようにしましょう。

【ロタウイルスには重症化を防ぐワクチンがあります。】

アメリカなどの国では、すでに定期予防接種(無料)になっており、WHO（世界保健機関）でもワクチンを推奨しています。しかし日本では2011年から任意接種で、生後6ヶ月までに2~3回接種する必要があり、費用は1回1万2000~1万5000円ほどで保護者の負担が大きいのがネックになっています。



ワクチンによって、ロタウイルス性下痢症の重症化を9割程度減らすことができると報告されています。